

陳舜臣さんを語る会通信

NO.75

Jul.

2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年7月10日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

続いて初期の推理短編集を2冊『幻の百花双瞳』と『六甲山心中』

前号に続いて初期の推理短編集を2冊、『幻の百花双瞳』（1969 講談社）、『六甲山心中』（1971 中央公論社）の順に紹介いたします。下の枠、小見出し及び傍線は編集委員の加筆。
(編集委員 橘雄三)

徳間文庫版、新保博久
「解説」より抜粋引用



「幻の百花双瞳」
中華料理を扱ったミステリ
短篇の筆頭

仮に、中華料理を扱ったミステリの短篇アンソロジーを編む機会に恵まれたなら、本書の表題作「幻の百花双瞳」は、まっ先に入りたい一篇である。他に嵯峨島昭「北京烤鸭殺人事件」、半村良「巨大餃子の襲撃」、……などが思い浮ぶが、料理とミステリが不可分に結びついて点で、「幻の百花双瞳」をしのぐものはちよつと見あたらない。

最初の神戸ミステリ集

この短篇集は神戸を背景にしたものが多い。「ダーク・チェンジ」にははつきり地名が書かれていないが、これも神戸と考えていいだ

ろう。五篇のうち巻末の「神に許しを」を除く四篇、まだが神戸ものなのだから、短篇集全体としては『六甲山心中』（一九七一年）に先だつ神戸ミステリ集と言ってもいい。

収録五作、初出は同じ時期

収録作品はいずれも、直木賞を受賞した一九六九年の前半に発表されており、初出の順に誌すと、「神に許しを」（三月）、「幻の百花双瞳」（四月）、「ダーク・チェンジ」（同月）、「フラワールード・サンバ」（五月）、「港がらす」（同月）となる。このうち、神戸の風俗が鮮やかに描かれているのは「フラワールード・サンバ」「港がらす」の二篇だし、推理小説的な切れ味では「ダーク・チェンジ」が出色だろう。

珍しい作品「神に許しを」

「神に許しを」は陳氏には珍しく西洋史上の人物の行跡を追う、最後に大胆な仮説を示した歴史推理だが、主人公サルマナザールは「フランスのいかさま著作家」として『岩波西洋人名

辞典増補版』（一九八一年）にも掲載されている。

百花双瞳は陳さんの命名

さて、百花双瞳だが、『美味方丈記』（一九七三年毎日新聞社）の中に「まぼろしの百花双瞳」という一章がある。この本は陳氏と錦墩夫人との共著になっていて、陳氏単独のエッセイとは文体が全く違うから、夫人が主に執筆し、陳氏は材料を提供したり文章に手を入れたりしたのである。とにかくこの本によれば、

「百花双瞳」というのは、夫が小説の中で名づけたもので、實在するものではありませんが、もしあれば偶然の一致です。眼のような形をした点で、その上に豆かサクラノボを二つのせてヒトミが二つついている形になるのです。双瞳と名づけたのです。一つの眼に二つのヒトミがあるなんて化物ですが、これは「重瞳子」といって、才能抜群の相とされています。漢の高祖と天下を争った項羽がそうでした」という。

一九八七年九月 新保博久

『幻の百花双瞳』補足 「美味方丈記」

出版社の編集者、新聞社の記者にとつて、陳舜臣さん宅訪問は楽しみだったようです。陳さんの話より、奥さんの手料理目当てという不埒な独身者もいたとか。

その奥様と陳さんの共著になる『美味方丈記』のことが上の枠内、新保博久氏の「解説」に出てきます。

百花双瞳という料理名が陳さんの命名という箇所は中公文庫版の37頁です。是非、お読み下さい。



画像は、中公文庫版のカバー表紙とカバー裏紙裏掲載のご夫婦の写真です。奥様のお名前は錦墩です。



『幻の百花双瞳』 各編紹介と補足

題 初出	『幻の百花双瞳』 各編紹介
幻の百花双瞳 『小説新潮』 昭和44年4月号	取調室で刑事の執拗な追及を受けながら、「私」丁祥道は二度と百花双瞳はつくるまいと思った。十四歳で広州から神戸の華僑宅に奉公に出され、主人から「あんなに美味しいものはなかった」と聞かされたのを職人氣質の料理長に洩らしたのが始まりだった。しかし、彼に手伝わされて料理法も材料も分からぬまま挑んだ幻の名点心が、こんなにも恐ろしい結末を呼ぶことになるとは…… (文庫本キャッチコピーより)
フラワーロード・サンバ 『小説現代』 同44年5月号	アメリカ人のステラ・ケイン(35歳)は観光旅行の途上、船で横浜に着く。ステラにとって日本は、船会社に勤めていた父の仕事の関係で、かつて、10年間を過ごした国であり、亡父の思い出につながる土地でもあった。ステラは、挨拶に寄った父の勤めていた会社で、サラゴサ号の新任船長ロバート・ハリソンと知り合う。彼女は、日本在留の最後の2年間、東京のある私立高校で英会話の教師をした経歴があり、東京でのスケジュールの一つは、この時の教え子、大沢庄吾と関口裕に会うことだった。あと、登場人物にサラゴサ号の前任船長ジョン・ハードとハードのコウベ・ワイフである日本婦人サエが加わる。ヤマ場は、大沢たちが参加した神戸フラワーロードのカーニバルの前夜及び当日、殺人事件を伴っておとずれる
ダーク・チェンジ 『問題小説』 同44年4月号	もと、広域暴力団大宮組の舎弟根津辰治が、南栄運輸を乗っ取って社長に納まったのは3年前であった。社長になると根津は、私生活面でも、プール付きのモダンな鉄筋住宅を新築し、永年連れ添った、組員から「あねさん」と呼ばれた信江と別れ、「社長夫人」が似合う阿紀子と再婚する。ストーリーは、ほか、お手伝いの「私」、南栄運輸の前社長の息子中村慎造らが絡み、追い出された信江の復讐劇という形で進展する
港がらす 『小説エース』 同44年5月号	神戸港で沖仲仕をしていた河上庫吉は作業中に負傷、肩をやられて力仕事ができなくなり、今は荷後屋に雇われている。荷後屋とは、荷役のあと、舁に残った雑穀や金属や鉱石類を掃き集めていただいて行く商売だ。庫吉の主人は、もと、伊勢で海女をしていた女で、港では「アパッチのお秋」で通っていた。庫吉は使用人だが、お秋の情夫でもあった。そんな庫吉のところへ、外国航路の船員をしている竹馬の友、杉並勝がやって来る。これが事件の先触れとなる
神に許しを 『別冊文藝春秋』 第107号 同44年3月	サルマナザールは実在の人物である。18世紀初頭、ヨーロッパ人は東アジアに関心を寄せていたものの、ほとんどの西欧人にとって東洋は未知の世界だった。サルマナザールはフランス生まれにも関わらず自らを台湾人と偽り、偽書の傑作『台湾誌』を出版し、主にロンドンのサロンで注目を集めた。サルマナザールを描いた「神に許しを」は陳作品にあって珍しい作品である。『幻の百花双瞳』所収の他の4作に比べ、舞台も時代も異なり、ここに収められているのが奇異である。収録根拠は同時期の執筆と言うことか

『幻の百花双瞳』

「神に許しを」補足

私(橋)はサルマナザールという人物を知らずに読んだので、「神に許しを」は、よく分からない作品でした。「陳舜臣さんには、こんな作品もあるのだ」というのが率直な読後感です。

それに対し、ネットで拾った感想文に次の文章があり、感服しました。知っている人は知っているのですね。それに、読み方が深い。



さぶろうの領土

表題作を含む5作

の短編が収められている。私は18世紀に実在した稀代の詐欺師ジョージ・サルマナザール(『台湾誌』の著者)について書かれた「神に許しを」が目当てで読んだ。フランス人である彼がなぜ台湾人を名乗り、行ったこともない台湾についてのデータも知識を捏造して語ったのか。とても細やかな心理描写で描かれて非常に面白く、なにより説得力があった。5作ともミステリー(推理小説)として書か

れているが、ミステリーとして読むよりも、それぞれの登場人物たちの心情や感情を味わいながら読む作品だと思った。

「神に許しを」から引用します。

人間の額には、限られた少数の同類にしか見えない烙印が捺されているのだ。イネスはサルマナザールの額に、それらしい烙印を認めた。

連隊付牧師、ウィリアム・イネスは、サルマナザールにペテン師の臭いを嗅ぎつけ見破る。そして、囁く。イネスは、台湾人サルマナザールを演出し、サルマナザールを利用する。



ddnavi.com/serial/570128/a より

神戸もの短篇ミステリ6作を収録『六甲山心中』

本号1、2頁に紹介した『幻の百花双瞳』所収5編は、「神に許しを」を除く4編が神戸ものです。ということで、もう一冊も神戸もの、『六甲山心中』(1971 中央公論社)を取り上げました。

「解説」中の小見出し及び傍線は編集委員の加筆。

中公文庫版、足立巻一「解説」より抜粋引用



陳さん、再度山登山は
山本通りの家の時期

ここに収められた、サスペンスを内容とする六編の短編小説は、作者が「あとがき」でいうように神戸を舞台としたことで共通している。

また、陳舜臣氏が直木賞を受けたのは昭和四十三年下半期であつたから、この六編は受賞の年とその直後に書かれた作品ばかりでもある。

この時期、陳さんは神戸の山手である山本通りに住んでいて、朝の登山を日課にしていた。登山靴をはいて、毎朝七時ごろ家を出、谷川沿いの道を再度山へ登ってゆく。少々の雨でも出かけた。往復三キロたらずで、その背山も四六八メートルの標高だけれど、のぼりはかなりきつい。「ぼくらは逃げた」に書か

れているように、神戸が海港都市としてひらけると、やって来た外人たちはグループをつくって登山をはじめ、それが市民にも伝わって、早朝登山をする習慣ができた。常連は自然に親睦会をこしらえ、山の茶屋にノートを備えつけて登山ごとに記名し、皆勤賞や精勤賞を出しあつたりした。「ぼくらは逃げた」に「谷道が登山道になっていて、何軒かの茶店もある。ふつうの民家もすくなくない。……早朝には何百人もの常連の登山者が登って、茶店の広場でラジオ体操をするのだ」とあるとおりである。

陳さんもその常連のひとつりで、直木賞を受けたときは、常連が山でお祝いをやったそう。そして、受賞直後のとりわけ執筆に多忙であつたそのころも、往復一時間あまりの登山は欠かしたことがなかった。山ではいつも漢詩を微吟していたという。

足立氏「推理小説より歴史物やエッセイのほうが好き」

陳さんは推理作家であるとともに大変な知識人であり、日本の現代詩人とは異質の詩人でもある。いつか陳さんの人と文学を語るテレビ番組に友人として

出て、そのことにふれたついでに「推理小説より歴史物やエッセイのほうが好きだ」と口をすべらせた。陳さんは「ほめられたような、クサされたような」と苦笑した。それはあくまでわたしの好みであり、推理小説以外のものに教えられたことが多かったからで、作者のせいではない。その点、わたしは陳さんの推理小説を語るのには適格でないかもしれない。でも『六甲山心中』は、もちろん作りあげられた、現実にはないミステリーの物語といつても、そこにぞらしさがなく、神戸という町の風土が物語りのなかにこねられてきつている、とは自信をもっていえることである。



「直木賞受賞祝賀会」

於：再度山灯籠茶屋前 1969.2.2 撮影

詳しくは本通信No.54参照



旧陳舜臣邸 2022年5月撮影
遠景、神戸のまちと港が見える
詳しくは本通信No.73参照

『六甲山心中』「あとがき」

「あとがき」冒頭の数行です。

いま私は書斎の南の窓から、神戸のまちを見下ろしている。夏の夕陽を浴びて、一直線の防波堤が港に白く伸び、そのむこうを紀伊の山なみが縁どっている。ふりかえって、東の窓をみると、そこから六甲山の緑がのぞきこんでいるようだ。木々の息吹きは、私の膚にまで伝わってくる。

「あとがき」の日付は一九七一年八月となっている。伯母野山への転居は一九六九年十二月です。また、収録作品の初出は、一番早い「骨を洗う女」が昭和43年1月号、一番遅い「僕は逃げた」が昭和45年9月号です。から、6作は、山本通りの家から、伯母野山の新居(六甲山房)にかけての執筆です。

『六甲山心中』 各編紹介と補足

題 初出	『六甲山心中』 各編紹介
六甲山心中 『問題小説』 昭和43年11月号	死に場所を探して夜通し六甲山中をさまよった航太郎と牧子は、早朝、二人連れの男に出会う。航太郎・牧子と二人の男は、格闘となり、あげく、航太郎・牧子と一緒に生き埋めにされようとする。二人の男は工事現場の朝出の作業員に見えたが、実は殺人犯で、さて…
染められた骨 『小説新潮』 同44年9月号	古河照子は三年間のアメリカ留学中にアメリカ青年と同棲し、破局、墮胎。その後、帰国して、南米の一小国モルマテ共和国の神戸領事館に職を得ていた。照子はある初夏の一日、唐招提寺に遊ぶが、境内で三十前後の男性から声をかけられる。名刺には、商社としては超一流の三弘物産市場調査室高木康雄とあった。二人の関係は、二年前のアメリカ人青年の時と恐ろしいほどよく似て経過する。ほか、登場人物にモルマテ共和国神戸領事のバルボサ、書記コスタが加わり、本国でのクーデターまで絡み進展する
三角犯罪 『小説セブン』 同45年2月号	B重工業営業部高浜啓一郎は、村崎葉子とデートし、深夜に戻ったアパートで見知らぬ男の死体を発見する。鍵を挿しても玄関ドアが開かないはずで、窓ガラスを割って入ると、内側のノブにはコードが巻き付けられ、それがそばの柱にしっかりと結びつけられた「密室」であった。警察は、たれ込みもあり、窃盗グループの内輪もめと読み、素早く犯人を検挙する。しかし、高浜は「胸に兆した疑い」にこだわる…
幻の不動明王 『問題小説』 同45年3月号	佐野淳子は、ヒッピーまがいのグループ、ユニコーンの仲間に入っている。淳子の父佐野隆一郎は、社長を辞めて会長に祭り上げられ、今は書画骨董にエネルギーを向ける。一千万という大金が必要になった淳子は、父が探し求める村田仙岳作不動明王の贋作を父に売りつけ一儲けすることを企む。一千万は、ユニコーンのメンバーを収容する場所、サロンを得るためのもので、筋書きを作り、グループのメンバーが役割を演じる。首尾、結末は？ (不動明王イメージ。画像は長田晴鳳作「不動明王像」→)
骨を洗う女 『小説現代』 同43年1月号	君島悦二は、三明倉庫神戸支店に赴任早々のある晩、元町裏の居酒屋で栗色の髪をした外人女性マーシャと出会う。五度目のデートのあと、彼女の家、北野町にある古めかしい木造洋館に誘われる。マーシャは、かつて、この家で両親と暮らしていたが、今は一人暮らしという。その夜の彼女の話によると、自分たちは神戸に住みついた白系ロシア人で、3歳の時、母が病死し、8歳のとき、父が死んだ。父親の死は、ロシア人同士の決闘によるもので、今なお、遺骨はこの邸の床下に眠っているという。さて…
ぼくらは逃げた 『小説セブン』 同45年9月号	「ぼく」17歳、ミチコ16歳。「ぼく」にとっては、この世の中には仲間と、そうでない人間の、二種類しかない。「ぼく」は、「仲間」緒方ミチコと知り合い、同棲を続けている。「金がほしいなあ」と言い合う二人が、ミチコの情報で、北野町にあるアメリカ人マッケンジー邸に押し入り予想外の大金を手にする。郵便配達に見つかり、二人は裏山へ逃げ込むが、制服、私服、大勢の警官による搜索が迫ってくる



『六甲山心中』

前頁、足立巻一氏「解説」の補足

再度山登山の箇所、補足します。

『燃える水柱』から引用します。

弘法大師が二度この山に登ったことから、『再度山』と呼ばれるが、その谷川ぞいの道は、市民のちよつとした運動に手ごろなので、毎朝登ってくる人が多い。たまたまその再度山の麓に住むようになったので、私は朝食前の登山を日課とするようになった。ただし、この山のラッシュアワーは午前六時ごろである。ラジオ体操を茶店の庭で、そろってやることになっているので、その時刻にあわせて登るのである。だが、夜の遅い仕事なので、私の登山はラッシュアワーからだはいぶされる。午前八時をすぎてから家を出るのだ。(中略)

いつものように茶店で紅茶を飲み、七言絶句を五首読んで、それから帰ることにした。(徳間文庫版p.184-185)



燈籠茶屋に置かれた「神戸武夷登山会」の署名簿 編集委員撮影